

<教材研究コーナー>

「火をおこそう」

森 下 一 期

木の摩擦で火をおこそうとする試みは進でもやってみたくなることですが、摩擦面が熱くなったり、煙りが出たりはするのですが、仲々火がつくまでにはいきません。くたびれはてるまでやってもうまくいかないと、本当につくのかな、とうたがいたくなってしまいます。

私もこれまで、ただ摩擦すれば良いのだろうと、発火技術そのものを調べもせずに何回も試み、失敗を重ね、材料のせいだろうとか、ごまかしてきましたが、ある機会に、重要なことを学んで、やっと成功しました。

自分のおこした火で煙草でもすうのは何とも言えない良い気持ちです。みなさんも、自分で火をおこす感動を味わって下さい。

<準備>

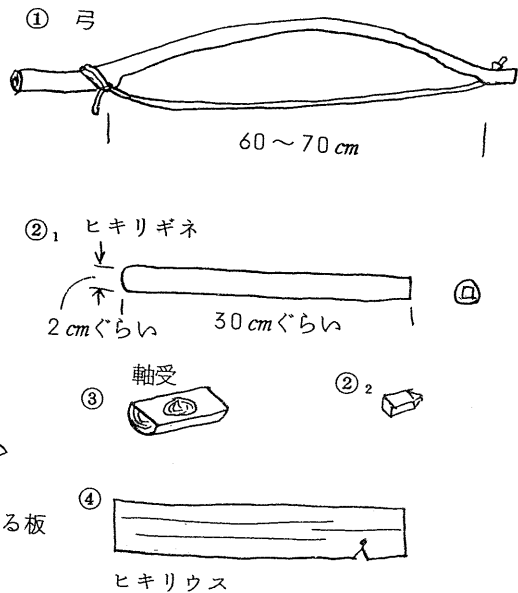
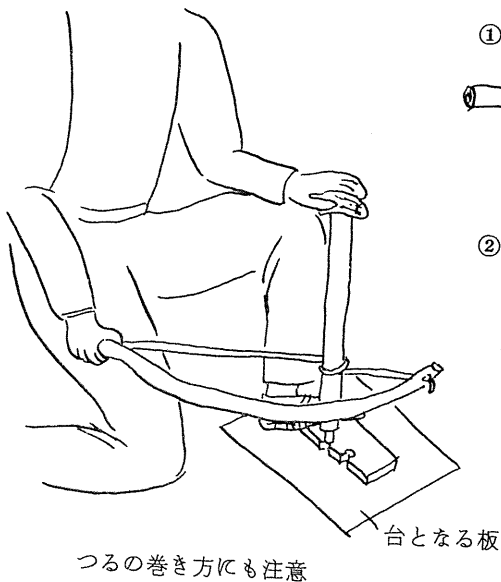
ここでは弓ギリ式を紹介します。

下図のように弓のつるをヒキリギネにまきつけ、軸受で下におしつけながら回転させる方法です。準備すべきものは下図①~④と下にひく板切れです(30cm四方ぐらいのベニヤ板で良いでしょう)。それぞれについて説明しましょう。

①弓

木の枝で、少しわん曲してつるをまきつけやすそうなものを見つけましょう。あれこれ上を見ながらさがし、気に入ったものを切り取るのも楽しいことです。

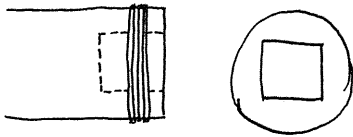
つるは、できたら、巾1cmぐらいで長さ1mぐらいの皮ヒモが良いのですが、なければ



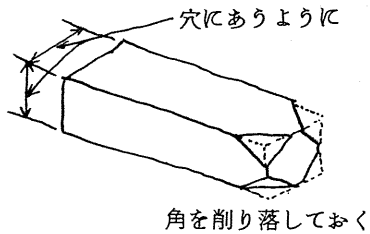
荷づくり用のビニールヒモを何本かたばねたものでも良いでしょう。しぼりつけるには、先端をしっかりとむすび(板に穴をあけると良い)手前の方では調節できるようにしておきます。

② ヒキリギネ

モップの柄が手頃でしょう。何回もやったり、材質を変えられるように、この丸棒の先端にキネをさし込めるようにしておくとう便利です。



図のように四角に深さ1cmぐらいにノミで掘り込みます。われそうなときには、針金できつくまいておいて下さい。そこに、下図のようなキネをいろいろな木で準備しておけば自由にとりかえることができます。



なお、丸棒の軸受に当たる部分は、丸く削っておきます。

③ 軸受

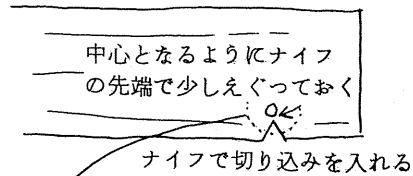
直径3~4cmの棒、長さ5~6cmのものをナタで半分に分り、中心をえぐります。ある程度の深さがあり、丸棒にうまく合わないと回転させている途中ではずれてしまいます。手で握りますから、手におさまるように、まわりも削っておきましょう。

④ ヒキリウス

杉板でも、檜でも良いようです。いろいろなもので試みることにすると良いでしょう。カマボコの板など、厚さも手頃です。ただし

乾燥していることが大切です(ヒキリギネについても同様)。室内に長い間あった古材なら、かなり乾いています。

ヒキリウスで大事なことは、図のように切り込みを入れることです。そこに、高温になった木のクズがたまり、発火するのです。



キネが回転する円(切り込みが中心近くまでいかないと、炭の粉がたまらない)

<火をおこす>

さて準備ができました。前頁の図のように足でしっかりヒキリウスの板をおさえ、ヒキリネギにつるをまきつけ(手前が上にくるよう一回まきつけて下さい)。最初はかるく回転させます。うまく回るようになったら、軸受を強く下におしつけ、弓の前後も早くして、いきおい良く回転させます。

煙りが出てきますが、一段と強くなったところで、V型のくぼみに粉がたまっていたら、回転をやめ、静かに息をふきつけながらウスをとります。うまく点火していれば、炭の粉の中に赤く点火している部分を見つけることができます。

一回では仲々うまくいきません。ウスの切り込みの具合を変えて、何回も試みてみましょう。何十回かやるうちには、誰でも、火をつけることができます。

しかし、これは、火種ができただけです。炎にするには、経木にイオウを含ませた付け木を利用するとかしなればなりません。

キャンプなどで、マッチを使わずに火をおこすことができたなら、どんなに楽しいでしょうね。ぜひ試みて下さい。

<参考>『原始技術史入門』

岩城正夫著 新生出版